

とっつかか ひっつかか

南部町諸木

絵：野口宣友



むかしむかし、あるところに、
誰にも好かれる心やさしいおじい
さんがおりました。

ある日おじいさんは隣町へ蓑や
草履を売りに出かけました。隣町
から帰る頃には、すっかり辺りは
薄暗くなり、ふくろの声も聞こ
えてきません。「このタワ(峠)は、
きよて(怖い)なあ、真つ暗にな
ってきた」とつぶやきながら、お
じいさんが山の中の一本道に入る
と、やがてどこからか低い声が響
き渡るように聞こえてきました。

てきていました。

えらく背中が重たいなあと思っ
ていると、迎えに出てきたおばあ
さんがびっくりにした様子でおじい
さんの背負った籠を見ています。
おじいさんが籠を覗きこ込むと、
籠の一杯に銭が入っていました。

それを見ておじいさんとおばあ
さんは、「ああ、おじいさんや、こ
れでいい正月を迎えられえな、良
かったな」「うん、そげだな、よか
ったな、おばあさん」と喜び合
いました。

ほう、とーつかか、ひーつか
か」と声が聞こえてきました。隣
のおじいさんは喜んで、「早いに
こしたことはねえ！取り付け！早
く引っ付け！」と答えると、また
同じ低い声で「とーつかか、ひー
つかか」と聞かぬので、「とつかは
とつか！ひつかはひつか！」と答
えながら「早く！早く！とーつか
か、ひーつかかじゃのうて、』と
つかはとつか！へつかはへつ
か！」と急かすと、だんだんと
背中が重くなってきました。

声は、「とーつかか(取り付)こ
うか、ひーつかか(引)付こう
か、とーつかか、ひーつかか」と
言っていました。それを聞いて怖
くなったおじいさんは、足早に山
を下りました。しかし、下りても
下りても、声は後を追うように「ほ
う、ほう、とーつかか、ひー
つかか、ほう、ほう」と迫っ
てきます。

恐ろしくてたまらなくなったお
じいさんが、「取り付くなら取り
付け！引っ付くなら引っ付け！」
と叫ぶと、いつの間にか家に戻っ

その話を聞いた隣のおじいさん
は、「ふっしょーおらもそ言うって
銭をもらって戻らんといいけん」
と、山へ行くことにしました。隣
のおじいさんは、がいな(大きな)
籠を背中に負って、夕方の早い内
から深夜まで、山中を走り回って、
籠一杯に銭を儲けようと、おばあ
さんが止めるのも聞かず山へ出発
しました。

隣のおじいさんが山に入ると、
やがておじいさんが言っていたよ
うに、「とーつかか、ひーつかか、

隣のおじいさんは大喜びで山を
下り、「ばあさん！籠を覗いてみ
てごせや」と言って、庭に籠を下
ろして見ると、なんと籠の中には
松脂が一杯に入っていました。そ
の上、ねちゃねちゃとした松脂は
隣のおじいさんの体中にこびりつ
いていました。隣のおじいさんは
「うわあ、気持ち悪い！」と叫ぶ
と、また山の中から「とつかかー、
へつかかー」と隣のおじいさんを
嘲るような声で、いつまでも聞こ
えていました。

おしまい